



#13

リミテッド・ラブーズ

著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

「ねえ、きみ。あたしの彼氏になってくれない?」

「えっ!？」

「だじょーぶ、ほんの1時間だけでいいから!」

「えええっ!？」

君里祐樹はフリーズした。

街なかで知らない女の子にいきなりそんなことを言われれば、誰でもそうなるというものだ。

「え、ええと、彼氏って? 1時間って……?」

「そう期間限定彼氏!」

あたふたする祐樹に頓着することなく、目の前の彼女は快活そうに笑った。ちよつとソバージュの入ったセミロングの茶髪が楽しげに揺れている。

元氣いっぱい、という感じで追ってくる彼女に、もともと内向的な祐樹は圧倒されるばかりだった。

だいたい祐樹はクラスの女子ともめつたに話したことがない、草食系非モテ男子なのだ。唯一の例外は一緒に図書委員をやっている城ヶ崎静香だったが、彼女も祐樹同様、内向的な性格なので、図書委員の仕事に関するごく最低限の会話しかした記憶がない。

改めて目の前の彼女を見る。

造作の整った目鼻立ちや、まるで小さな貝殻のアクセサリのような耳は美人……というよ

りは可愛いという印象だった。

ただ自分の身の回りに普段からあまり化粧をする女性がない祐樹にとっては、入念に施されたメイクや耳のピアスなどには少なからぬ違和感があった。

ケバい……とまではいかなくても、祐樹からするといかにも遊んでそう、という印象で、どちらかというと苦手なタイプであった。

祐樹は思った。

これはきつとあれだ。

なんかわからないけど、とにかくそういう水商売系の危ない勧誘だ。

こういう手合いには関わり合いにならないのが一番……。

「ほら、あれ!」

さりげなく身を引いて立ち去ろうとした祐樹の右腕を強引にくっつくかむと、「期間限定彼女」はすぐ目の前にあるカフェを指さした。

【毎月恒例カップル限定イベント開催中!】

【パティシエおすすめセットがカップルに限り半額!】

「もしかして……これが食べたい……から?」

「そうそう！」

柘樹は迷った。

実はこのカフェ「ミラーージュ」のスイーツはかなり前から気になっていたのだ。

ただあまりにも女性客が多く、男が一人で入るには敷居が高すぎるため、二の足を踏んでいたというわけだ。

「うーん……………いいよ。1時間だけなら」

「まじ!? さんきゅー!!」

「うわっ!?!」

さんざん逡巡した挙げ句、ようやく承諾した柘樹を「期間限定彼女」はぐいぐいと店の方に引っ張って行く。

「あのさ、呼び名決めようよ」

「え?」

「だってあたし達『カップル』でしょ? お互いの名前を知らないカップルなんている?」

「そ、そこまでする必要あるのかな?」

「あるの! 君、名前なんていうの?」

「君里…………柘樹だけ!」

「うーん、ゆうきかーゆうきゆうきゆうき…………じゃあ、ゆきりん!」

「えー…………それはさすがに恥ずかしいような…………」

「いいの、いいの! 1時間だけなんだから! よろしくね、ゆきりん♥」

「えー、本当に呼ぶの…………? じゃあ…………」

「ん?」

「じゃあ、君のことはなんて呼べばいいの?」

「あたしはエリス!」

「え? なんで外人?」

「いーの! あたしはエリス! 反論は認めない!」

エリスつてもしかして源氏名かなんかじゃないの? と柘樹は訝った。

ともかくにもこうして「ゆきりん」は「エリス」に店内へずるずると引っ張り込まれていったのだ……。

「うわー、美味しそうー! いっただっきまあーす!」

運ばれてきたチョコレートケーキに目を輝かせて早速バクつくエリス。よほどお腹がすいていたようだ。

対する柘樹は小さなフォークを手にしたまま、微動だにせずケーキを見つめていた。

「ん? どしたの? 食べないの?」

「綺麗だなあ……」

祐樹は、ほう、とひとつ小さい溜め息をついた。

「こんな美しいオペラ初めて見たよ。やっぱり噂通り、ここのパティシエさんはすごい人なんだね……」

「オペラ？」

「このケーキのことだよ。見た目はシンプルだけど、すごい手間のかかるケーキなんだ。見てよ、このガナッシュと生地きじの織り成す層の美しいこと……こんな綺麗にはなかなか仕上がらないよ……」

「へー、ゆきりん詳しいー」

「そんなことないよ。こんなこと言うと変かもしれないけど……僕、ケーキ作りが好きで、休みの日とかよく作ってるんだ。今はシフォンケーキに凝ってる……」

「へー」

そこまで言って祐樹は何故こんなことを初対面の女の子に喋しゃべっているのかと気づき、急に恥ずかしくなった。どうもエリスは人の心をほぐし、饒舌じょうぜつにさせるオーラを持っているようだ。「素敵すてきだね！ ケーキ作れる男子ってかっこいいよ！」

「そ、そうかな？」

「うん、絶対いいよ！ ゆきりんの彼女になったらケーキ食べ放題ってことだもんね？」

そう言つてエリスは愉快ゆかいそうにころろと笑った。

そういうことじゃないんだけどな、と祐樹は思ったが、屈託くつたくのない彼女の笑顔につられて、いつの間にか笑えみを浮かべている自分に気がついてちよつとだけびっくりした。

「あー、美味しかったね！」

「うん。あれだけのクオリティのケーキが半額で380円なんてちよつと申し訳ないくらい」

「あだし、今度はゆきりんのつくったケーキも食べてみたいなー……」

「え？ なに？」

「ううん、なんでもない！」

エリスの小さな眩くらきは雑踏ざつたつのざわめきにそのままかき消されてしまったようだ。

「じゃ、僕はそろそろ」

「あっ！」

さりげなく帰ろうとする祐樹の腕を、エリスがまたぐつとつかまえた。

「え？ な、なに？」

「あれ！」

エリスが指したのは駅前駅前の映画館映画館だった。

【本日カップルデー カップル様に限り特別料金にて御案内中！】

「まさか……」

祐樹がおそるおそるエリスの方を振り向くと、彼女はすでに両手を顔の前で合わせて「一生のお願いポーズ」に入っていた。

「ゆきりん、あたしと映画観るのいや？」

エリスは上目遣いに祐樹を見ながら潤んだ瞳でそう言った。

「いや、別に……いや、じゃ……ないけど……」

実際、夏休みで何の予定もなくぶらぶら街を歩いていただけなので、時間は有り余るほどある。

それに今、駅前の映画館でかかっている映画は祐樹が好きなバム・ペキンサー監督の最新作「ストロウ・ドッグズ」なのだ。

「でも、ほら、さ……」

「ん？」

祐樹が「ストロウ・ドッグズ」の特大ポスターを指さした。そこには書かれていたのは「R-18」の赤い文字。

そうバム監督はバイオレンス描写が過激なことで知られていて、高1の祐樹はいつも社会人

である兄に頼んでレンタルビデオ店で借りてきてもらって監督の作品を観ていたのだった。

「へっへーん、それなら大丈夫★」

エリスは自信ありげな表情になって、何やらポーチを探りはじめた。

そこから出てきたのは……。

「サングラスと……アフロのカツラ？」

いったいこんな小さなポーチにどうやって収まっていたのだろうというぐらい巨大なアフロカツラを2セット取り出して、エリスは満面の笑みを浮かべた。

「はい！」

「え？」

エリスは無言を言わず、祐樹にすぽっとアフロを被せ、サングラスを着用させる。そして自身も同じようにアフロとサングラスを手慣れた様子でちゃちゃっと装備した。

「じゃ、行くわよ！」

「え？ 無理だよ、無茶だった！」

この格好、どう見ても100%不審者に間違いない。確実に受付で止められるし、まかり間違えば通報されるかもしれない。

いやだ！ それだけは絶対いやだ！

「通れた……」

祐樹とエリスは何のツツコミもなくあつさり受付を通過し、映画館の中に入ることができた。なんかエリスも「シャチヨサンー、オトナーニマイネー」とか怪しいカタコトの日本語言ってるから、受付のお姉さんも単に関わりあいになりたくなかったんだらうな……。

「怖かったけど面白かったねー!」

結局二人は二時間たっぷり映画を堪能した。

映画館を出て並んでゆつくりと駅の方へ歩いていく。即席カップルも少しは馴染んできたようだ。さすがにもう二人ともアフロは取り外している。

「うん、脚本も良かったし、なんといってもバム監督の演出がさらにシャープになっててすごかったなあ〜」

「……今日はありがとね」

「え?」

「無理言ってつきあわせちゃって……」

「あ、ううん。最初はびっくりしたけど……僕も楽しかった」

「ほんと!?」

「うん、本当に楽しかった」

「良かった……」

エリスははにかむような笑みを浮かべて少しうつむいた。何かをじっと噛みしめるような表情だ。

「あのね!」

「ん?」

「もしよかったらまたきьяああ!」

「エリス!」

隣を歩いていたはずのエリスが祐樹の視界から突然消える。

見るとエリスは派手に転んで尻餅をついていた。

しかしそこにいたのは何故かエリスではなく……

「城ヶ崎、さん!」

祐樹は絶句した。

「へ? あ! あわわ……」

エリス……もとい、城ヶ崎静香は自分の頭に慌てて手をやった。さっきまで装着していたはずのソバージュのウィッグは転んだ拍子にはずれ、路上に転がり落ちていく。

二人の間に気まずい沈黙が訪れた。

「本当に、城ヶ崎さん……なの? いつもメガネ、とかは……?」

「……」

祐樹の目の前にいるのは、確かに城ヶ崎静香その人だった。

施されたメイクと、今は赤らんでしまった頬のために、普段は決してまとうことのないような色香を漂わせてはいるが……その横顔は図書室の受付で見ると確かに同じものだった。祐樹が唯一、学校で話しかけられる女の子……城ヶ崎静香に間違いなかった。

静香は潤んだ瞳で何度も祐樹を見上げ、そのたびに震える唇で言葉にならない言葉を紡ぐうとした。だがそれはことごとく音声になる前に虚空に消えていつてしまう。

しかし。

「あのね！」

「はい!？」

突然、静香は鬼気迫る表情で祐樹に詰め寄った。

「あのね、あたし、こんな性格だから自分から言い出せなくて！ そしたらお姉ちゃんに形から入れて言われて！ お姉ちゃん演劇部だからいろいろ持つてて！ いろいろ詳しくつて！ エリスってキャラ創ってもらつて、ウィックつけてお化粧してもらつたら、役に入つたっていうかなんだか自分が変わった気がして！ なんか身も心もエリスになりきつたっていうか！ 今まで湧いてこなかったような勇気が湧いてきたっていうか！ だからこのキャラなら言えるって思つて！ だからだから！ 君里くん、前からミラージュ行きたがつてたの知っ

てたし！ パム監督も好きだつていうのも知つてたから！ いっぱいいっぱい調べて！ 今日ならカップル限定イベントがあるから、それで！ それで……」

静香はそこまで一気にまくしたてると急にスイッチが切れたように黙り込んだ。

「やっぱり、おかしいよね……こんな変な子、いやだよね……」

いつの間にか静香の目には大粒の涙が浮かんでいた。

ライトブラウンのカラコンが涙に浮いて微かに揺れている。

「ごめんな……!？」

踵を返して走り去ろうとした静香の腕を、温かい手が捉えた。

つかの間、二人の間に再び静寂が訪れる。

「僕、今、シフォンケーキに凝つてるんだ！」

「え?？」

静寂を破ったのは祐樹だった。

静香の腕を握ったまま、祐樹は頬を朱に染め、さらに言葉を接いだ。

「だから、来月のミラージュの……限定イベントのシフォンケーキも……食べたいんだ……」

「……」

「だから今度は……1時間だけ……僕の『彼女』になつてくれる?？」

ぱりぱりと頬を掻きながら、静香と視線を合わせず、ぼそぼそと祐樹は呟いた。

静香の涙が、嬉し涙に変わるのに、そんなに長い時間はかからなかった。

おしまい